様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１３１０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2015
課題番号：２６７７００３４

研究課題名（和文）近代日中知米派知識人の思想的交流 ―朝河貫一と胡適を中心に

研究課題名（英文）The intellectual exchange between two pro-American intellectuals: Japanese Asakawa Kan'ichi and Chinese Hu Shih

研究代表者
武藤　秀太郎（Muto, Shutaro）

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：１０６１２９１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、20世紀前半の日中両国を代表する国際的、知米派知識人として、朝河貫一と胡適に着目し、両者の間にみられた思想的交流の一端を明らかにした。朝河と胡適は1917年夏、偶然にも帰国の途についた際、バンクーバーから同じ汽船に乗り合わせていた。この点については、これまで胡適の評伝などで簡単にふれられたに過ぎないが、朝河と胡適の資料を読みあわせ、両者が航海中に親交を交わし、その後も連絡をとっていたことを確認することができた。この朝河と胡適の交流は、近代日中思想交流史上においても、重要な一環をなしていると考える。

研究成果の概要（英文）：Through this project, I examined the intellectual exchange between two pro-American intellectuals: Japanese Asakawa Kan’ichi and Chinese Hu Shih.
Asakawa and Hu had thus made remarkable achievements in each academic field. Although Asakawa and Hu were originally very hesitant to involve in politics, they were ready to take action or express their opinions overseas to protect national interests in cases of national crisis.
It is interesting to note that Asakawa and Hu had accidentally met on the way to their own countries in June 1917. It can be confirmed from their recently discovered diary and letters that Asakawa and Hu formed lasting relationships afterwards. These two closely-tied men were ironically forced to stand in opposition on policies toward the US during the second Sino-Japanese war. This project clarified the relationships between Asakawa Kan’ichi and Hu Shih, shedding new light on Japan-China historical relations of the first half of the 20th century.

研究分野：思想史

キーワード：朝河貫一　胡適　封建　民主

１．研究開始当初の背景

研究代表者は 2008 年 9 月から約 2 年半、中国政府奨学金を得て、上海の復旦大学に留学した。復旦大学では、歴史系に所属し、学部や大学院の講義を受講した。参加したのは、おもに思想史関連の講義であるが、その際に関心をもったのが、胡適という人物であった。

「胡適か、それとも魯迅か」と題した著書があるように、近年の中国では、胡適は魯迅とならぶ、近代中国思想を方向づけた代表的人物として位置づけられている。それに対し、日本における胡適の評価は、全集が翻訳、公刊され、研究も厚い魯迅と比べると低いといわざるをえない。だが、胡適に関心をもち、彼の全集などを読みすすめるうちに、思いの外、日本人との結びつきが強いことに気がついた。

朝河貫一と胡適の評価をめぐっては 1980 代以降、日本と中国でそれぞれ再検討がすすめられ、著作や書簡、日記といった文献資料の整備、アーカイブ化がすすめられている。

朝河貫一に関する初の本格的伝記である阿部善雄『最後の「日本人」』が出版されたのが 1983 年で、その後発足した朝河貫一書簡編集委員会により『朝河貫一書簡集』が公刊されたのは 1991 年であった。朝河の博士論文である『大化改新（*The Early Institutional Life of Japan*）』や『入来文書（*The Documents of Iriki*）』、封建制に関する論文を集めた『朝河貫一比較封建制論集』など、英文で書かれた諸著作も、2000 年代にはいり、つぎつぎと日本語に翻訳された。朝河の日記や草稿、講義ノートなどをおさめたイェール大学所蔵の *Kan'ichi Asakawa papers* や福島県立図書館の『朝河貫一書簡資料集』といった原資料も整理され、利用しやすい環境となっている。研究面では、1991 年に設立された朝河貫一研究会を中心に、朝河がポーツマスでの日露講和交渉の際にはたした役割や、彼の日欧比較封建制研究がもつ学術的意義、日米開戦を回避するために朝河がルーズベルト大統領に天皇宛親書を送るよう画策した経緯など、さまざまな点が明らかにされてきた。

他方、胡適については、中華人民共和国成立後、大陸で胡適思想批判運動が展開されるなど、政治的制約を免れなかったが、1978 年の改革開放以降、台湾や香港をふくめ、本格的に研究がすすめられるようになった。資料面では、何より日記や書簡をふくめた『胡適全集』全 44 巻が、2003 年に出版されたことがあげられる。また、台湾の中央研究院内にある胡適紀念館では、胡適の手稿、日記、手紙などの原資料が収集、電子データ化され、インターネットを通じて検索、閲覧できるようになっている。こうした資料の整備により、胡適が学術、外交面ではたした役割が大きく見直されるとともに、アメリカ滞在中の人間関係やいわゆる博士号取得問題、在米大使としてのロビー活動など、これまで注意がはらわれなかったトピックについても、詳細な研究がなされるようになった。近年、胡適の研究については、中国だけでも毎年、膨大な数の関連論文が発表され、胡適を中心にあつかった単著の出版も十指にあまる状況である。このように朝河、胡適に関する個別的研究は近年、大きな進展をみせているが、両者の交流については、先行研究で簡単なエピソードとしてあつかわれているにすぎなかった。

こうした事情のもと、研究をすすめていくうちに、胡適の歴史観が、朝河貫一からも大きな影響をうけていることが分かってきた。これが、本研究を開始する当初の背景である。

２．研究の目的

本研究の目的は、20 世紀前半の日本と中国を代表する知米派知識人の思想的交流、具体的には朝河貫一と胡適の間でかわされた交流を明らかにすることにある。具体的には以下の 4 点である。

（1）朝河や胡適の日記、書簡から、両者が 1917 年夏、アメリカから帰国の途についた際、同じ汽車、汽船に乗りあわせ、親交をかわしたのが確認できる。朝河は、胡適の才能を認め、自らが進めていた日中の古典的名著を選定し、英訳するプロジェクトを明かし、中国巻の編集を胡適に依頼した。胡適は、朝河のオファーを快諾し、その喜びを知人宛の手紙につづっていた。この旅中における 2 人のやりとりについて、さらに関連資料を精査し、全体像を浮かびあがらせる。

（2）アメリカから帰国後、北京大学教授となった胡適は、旧来の学術的枠組みを変える革新的な主張をうちだしていった。その代表的な 1 つに、「整理国故」運動がある。「整理国故」は、古代の学術思想を系統的に「整理」し、「科学的方法」にもとづき考証することを指しているが、これに「封建」概念の面から重要な示唆を与えたと考えられる人物が、朝河であった。この点について、胡適が朝河の論文をどううけとめ、自説に活かしていったのかを具体的に明らかにする。

（3）IPR 主催の第 4 回国際会議をひかえた 1931 年 7 月、胡適は病気で辞任した余日章に代わり、会議の主席に就任した。他方、朝河は IPR と直接的な関わりをもたなかったが、IPR と密接な結びつきがあったアメリカ学術段階評議会日本研究委員会のメンバーを長年つとめた。また、日本 IPR の中心的役割をになった高木八尺はこの時期、朝河、胡適と連絡をとりあっていた。こうした IPR を舞台とした両者のとりくみについて、その全貌を明らかにする。

（4）1938 年 9 月、駐米大使に就任した胡適は、日中戦争の勝敗を決する鍵がアメリカにあると考え、何とか対日参戦にもちこもうと、積極的なロビー活動を展開した。これに対し、朝河も同様の考えから、日米開戦という最悪の事態を回避するために、ルーズベルトに平和と友好をよびかけた天皇への親書

を送るよう画策した。この時期においても交流をかわした形跡がみとめられる朝河と胡適の思想、行動について、その関係性を具体的に明らかにする。

３．研究の方法

本研究の期間は、2 年である。1 年目は、「研究の目的」の（1）、（2）で論じたテーマ、すなわち朝河と胡適が出会った 1917 年夏に、2 人の間でいかなる対話、学術的交流が交わされたのか、そして胡適がその後、朝河の封建制研究をどう評価し、自らの主張へと活かしていったのかについて考察した。2 年目は、（3）、（4）でとりあげたテーマ、すなわち IPR などの学術団体を通じた両者の人間的つながりや日中問題へのとりくみ、および 1930 年代末におけるアメリカの動向をめぐる朝河と胡適の言動を考察した。2014 年度、平成 2015 年度ともまず、朝河と胡適の著作、および関連資料を、日本、中国で改めて精査し、それらを収集、整理した。その上で、これらの文献をよみといてゆき、成果をまとめた。

４．研究成果

2014 年度は、研究課題である朝河貫一と鼓笛を中心とした近代日中知米派知識人の思想的交流について、論文を執筆し、アジア政経学会の学会誌『アジア研究』に投稿した。これは「朝河貫一と胡適 ―日中知米派知識人の思想的交錯」という論題で、9 月に発行された『アジア研究』第 59 巻第 3・4 号に掲載された。

この論文ではまず、朝河貫一と胡適が 1917 年、アメリカから祖国へと帰国の途についた際、偶然にも同じ鉄道、旅客船に乗り合わせ、学術的な議論をかわしたことを、両者のさまざまな資料から明らかにした。また、朝河と胡適は、これ以後も連絡をとりつづけ、とくに胡適の「整理国故」をはじめとした考えに、朝河が少なからぬ影響を与えたことを指摘した。この時期における朝河と胡適の言動については、それぞれ研究蓄積があるが、本論文では両者の関係を総合的に分析し、日中関係史、日中思想交流史において新たな一面を示すことができたと考える。

2014 年度はまた、朝河貫一や胡適と同年代である今井嘉幸、李大釗、小泉信三についても考察をおこなった。その成果として、2014 年 12 月発行の『孫文研究』大 55 号に「今井嘉幸と李大釗」を、2014 年 10 月刊行の猪木武徳、マルクス・リュッターマン編『近代日本の公と私、官と民』（NTT 出版）に「小泉信三の天皇像 ―君主をめぐる公と私」をそれぞれ発表した。

2015 年度は、4 月 11 日に早稲田大学でおこなわれた第 101 回朝河貫一研究会において、「朝河貫一と中国知識人」と題し、発表をおこなった。その後、発表内容を文章としてまとめ、8 月に発行された『朝河貫一研究会ニュース』第 86 号に寄稿した。

この論文では、福島県立図書館に所蔵されている未公刊の「朝河貫一資料集」をもとに、胡適をはじめとした中国知識人との交流の一端を考察した。とくに従来、差出人がイニシャルで不明とされてきたいくつかの手紙が、近代中国を代表する経済学者であった馬寅初が書いたものであると特定できたことは大きな成果といえる。胡適が主催した『独立評論』に、しばしば寄稿していた何廉と朝河との間にみられた交友関係も、書簡の解読を通じ明らかにすることができた。

2015 年度はまた、朝河や胡適が大きな関心をいだいていた博覧会事業に着目し、1910 年におこなわれた中国で最初の全国的博覧会であった南洋勧業会をめぐる日中関係の諸相を分析した。その成果が 10 月に公刊された佐野真由子編『万国博覧会と人間の歴史』に寄稿した「南洋勧業会をめぐる日中関係」である。この論文では、厳復が翻訳した T.H. ハクスリーの『天演論』を読み、社会進化の基礎に生存競争が存在すると認識した胡適が、その競争を促進する西洋由来のイベントとして、博覧会事業をどのうよにとらえていたのかを、当時彼が『競業旬報』に寄稿した文章などをもとに明らかにしている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

1 <u>武藤秀太郎</u>「今井嘉幸と李大釗」『孫文研究』第 55 号、孫文研究会、1-17 頁、2014 年 12 月、査読無し。

2 <u>武藤秀太郎</u>「朝河貫一と胡適 -日中知米派知識人の思想的交錯」『アジア研究』第 59 巻第 3・4 号、アジア政経学会、67-83 頁、2014 年 9 月、査読有り。

〔学会発表〕（計 6 件）

1 <u>武藤秀太郎</u>「近代歴史学と内モンゴル ―桑原隲蔵を中心に」新潟内モンゴル自治区文化講演会、クロスパルにいがた、2015 年 11 月 7 日。

2 <u>武藤秀太郎</u>「吉野作造の苦悩 ―信仰と友好の狭間で」第 4 回吉野作造研究賞受賞記念講演会、吉野作造記念館 2015 年 10 月 25 日。

3 <u>武藤秀太郎</u>「朝河貫一と中国知識人」第 101 回朝河貫一研究会、早稲田大学、2015 年4月11日。

4 <u>武藤秀太郎</u>「吉野作造と近代中国」近代中日間における知的・文化的共有基盤を再発見する国際シンポジウム、南開大学、2014 年 12 月 20 日。

5 武藤秀太郎「日中両国における人文学の概念形成 -「整理国故」と「封建」を中 心に」私立大学戦略的研究基盤形成支援事業キックオフ・シンポジウム、早稲田大学、2014 年 12 月6日。

6 武藤秀太郎「福田徳三と近代中国」福田徳三研究会第 15 回研究会、一橋大学、2014 年 11月15日。

〔図書〕（計 4 件）
1 武藤秀太郎「関東大震災をめぐる日中関係 ―王一亭と王希天を中心に」川口浩編『日本の経済思想 ―時間と空間の中で』ぺりかん社、301-28 頁、2016 年 02 月、査読無し。

2 武藤秀太郎「南洋勧業会をめぐる日中関係 ―上海万博との対比から」佐野真由子編『万博博覧会と人間の歴史』思文閣出版、621-46 頁、2015 年 10 月、査読無し。

3 武藤秀太郎「高橋誠一郎の経済学史研究」池田幸弘、小室正紀編『近代日本と経済学 ―慶應義塾の経済学者たち』慶應義塾大学出版会、213-37 頁、2015 年 9 月、査読無し。

4 武藤秀太郎「小泉信三の天皇 ―君主をめぐる公と私」猪木武徳、マルクス・リュッターマン編『近代日本の公と私、官と民』NTT 出版、138-61 頁、2014 年 10 月、査読無し。

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）
○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
武藤 秀太郎（MUTO SHUTARO）
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：10612913

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：